

## Hemingway の語法 (2) — 関係代名詞

伊 藤 清

Hemingway は従属節を使用しない作家と言われるが、実際にはどのようになっているかは明らかにされていない。しかし従属節の一つを導く関係代名詞が英文法に重要な地位を占めるのも、文構成に、また作品の内容および味わいに多大の影響を持つためであることを考えれば、彼の使用した関係代名詞の種類、方法および先行詞を明らかにすることは、その勝れた文体の解明への一つの手がかりを与えるであろう。彼の文体を総合的に、かつ内面的に把握する前になお個々の特徴を調べてみたい。

利用した作品は彼の初期の作品、*In Our Time* (1925—IOT と略、以下同じ)、*The Sun Also Rises* (1926—SAR)、*Men Without Women* (1927—MWW)、*A Farewell to Arms* (1929—FTA)、*Winner Take Nothing* (1933—WTN) および *Green Hills of Africa* (1935—GHOA) であり、Text は Scribner 版によった。

### I. 人間を先行詞とするもの

#### 1 主格：

	地の文	会話	計
who	262	63	325
that	38	32	70
省略	—	5	5
			400

この表に見られる如く、人間を先行詞とする場合地の文であっても会話においても、who が主力となるが、それは人間をうけるのは本来 who の役割であるとともに、先行詞の決定について読者の理解を速やかならしめるためであると考えられる。会話のなかの who の使用が同じ口語体の地の文中での使用より少いことは、会話の文と地の文の両者の間に、文体のもつ強度（力）と速度の差があることを示している。このことは関係代名詞の種類、格を問わず会話と地の文とを比較した場合のすべてに当てはまるものである。

地の文と会話とでは総量で相当の差があるが、会話の that については、地の文中の that とあまり使用度数において差異がなく、かつ会話中の who との比が、地の文中の who と that の比よりもその落差において遙かに少いことは、一般に会話体には that が多く使用されるとする英文の習性と一致している。そしてまた先行詞の数による who と that の使い分けは認められない。

全体から見て、6作品、1574頁のなかで、しかも人間を中心とした内容からすれば、主格としての関係代名詞400の使用は決して多いとは言えない。このことは、現在分詞、過去分詞および前置詞の利用によって主格関係代名詞の使用がかなり避けられているという事実をわれわれに示すものであると言える。

主格の省略（省略という言葉は適当ではないが、以下この言葉を使用することにする）については、‘It+be’ 或いは ‘there+be’ が文頭および文尾にある場合に限られ、すべて会話中に起っている。前二者は blending、後者文尾の ‘there+be’ は there を主語と感ずるために生ずる現象であると思われる。

“He must be about the best guy there is. ...”(IOT, pp. 50-51)

“... , but there was a lot of people didn't like it either way ...”  
(*ibid.*, p. 77)

“Baby clothes. There aren’t many people reach my time without baby things.” (FTA, p. 124)

“It was the Arab reminded me of it.” (WTN, p. 124)

“... There were Americans came here and they put whiskey in the beer.” (ibid., p. 174)

後述する人間以外を先行詞とする場合をも含めれば, ‘There+be’ が文頭にある場合には主格の使用される方が約3倍, かつほとんど地の文において発見され, 会話体との差異を見せている。殊に先行詞と関係代名詞との間に語句が介在する場合に, 意味の明確化のため用いられる傾向がある。その時人間を先行詞とすれば, who が主力となり that も共に使用され, 人間以外のものを先行詞とすれば that が主となり which が稀に使用されている。

“There’s some *people in there that* don’t like me.” (SAR, p. 188)

There was a *runner there from our last camp who* had brought a note, ... (GHOA, p. 275)

‘there+be’ が文尾に来る場合は例そのものが少く, 人間以外を先行詞とする場合をも含めて関係代名詞の使用されていないものが数例あるのみである。なおこの文型における目的格についてふれるならば, whom, that とともに用いられはするが, 他の目的格の場合と同様にその使用度数は低い。

There are people to *whom* you could not say insulting things. (SAR, p. 49)

There were three doctors *that* I knew. (FTA, p. 48)

## 2 所有格:

6 作品を通じて僅か9例地の文中にのみ現われている。所有格に代って文構成の役割を果たしているのは人称代名詞および名詞の所有格である。9例のうち whose name の4例と whose nose 以外は injustice, part, elegance, modesty

と悉く抽象名詞を従えているが、人称代名詞および名詞の所有格をもってしては文構成に好ましくない場合に限られていると言える。

### 3 目的格：

	地の文	会話
whom	8	—
who となるべきもの	2	1
that	5	2
省略	41	32

目的格の多くは表わされないという近代英語、特に近代口語英語の特徴を上掲の調査から、われわれは歴然と知ることができる。

manuel saw no one he knew in all the people he passed. (*MWW*, p. 9)

特に会話においてはその傾向が著しいと言えよう。that は動詞の目的語に使用される場合も前置詞の目的語として使用される場合もあり、その使用度数はあいなかばするが、whom については前置詞の目的語となる方が多く、すべて‘前置詞+whom’の形を採っている。読者に対し意味を明確にしその理解を速かならしめるためであり、更に文構成上の必然的な形である場合もある。

He once tried to warn a girl he knew against a man of whom he had almost proof that ... (*IOT*, p. 110)

Elliot had a number of friends by now all of whom admired his poetry ... (*ibid.*, p. 113)

なおこの‘前置詞+whom’の形は、人称代名詞によって代えられる場合もある。

There were so many good-looking young girls. Most of them had

their hair cut short. (*ibid.*, p. 92)

少数ながらその直後に来る挿入文の動詞に牽かれた破格がある。挿入文はいづれもある定形式のもので、この場合に *who* を用いた例はない。

He was shocked and really horrified at the way girls would become engaged to and marry men *whom* they must know had dragged themselves through the gutter. (*IOT*, p. 110)

“... Officers *whom* I thought could never realize it now.” (*FTA*, p. 183)

... but you loved some one else *whom* now you knew was not even to be pretended there; (*ibid.*, pp. 240-41)

逆に *whom* とすべきところに *who* を用いたものは次の一例のみで、low colloquial もしくは方言と見做すべきものである。

*Who* he liked was Mama. (*GHOA*, p. 40)

ただし関係代名詞でなければ次の如き low colloquial の形がある。

“... I want to see *who* it belongs to,” Dick said. (*IOT*, p. 27)

“... I don't care *who* you steal from. ...” (*ibid.*, p. 27)

人間を先行詞とする目的格 *that* 7例には *comma* の次に用いられたものが3例ある。これらは‘It~that’の強意形式であつたり、*that* の前に挿入句があつたり、それ自体が挿入節を率いたりしているが、人間以外を先行詞とする場合にも多いことから考えて、彼の *idiosyncrasy* と見做すべきものである。残りのうち3例は人称代名詞の主格に *know* を従えた同形式のものであるが、このような形式のときに *that* もしくは *whom* が現れるのは全体から見て例外的と言える程少い。

This is Brett, *that* I had felt like crying about. (*SAR*, p. 34)

Some one at the counter, *that* I had never seen before, tried to pay for the wine, but I finally paid for it myself. (*ibid.*, p. 157)

“... It's her, you know, that I'm taking the canary to.” (*MWW*, p. 184)

a captain *that* I know (*FTA*, p. 23)

three doctors *that* I know (*ibid.*, p. 48)

some fellow *that* he doesn't know (*WTN*, p. 191)

次は残りの一例である。

There was only one person in his family *that* he liked the smell of; one sister. (*WTN*, p. 240)

省略の項の中には意味や限定の度合の強い語で修飾された語を先行詞とする目的格の関係代名詞が地の文と会話にそれぞれ16例と18例あるが、それらでさえも *whom* はもとより, *that* によっても受けられず省略されている。この事実は現代英語における関係代名詞の目的格の姿を示している。

## II. 人間以外を先行詞とするもの

### 1 *which* :

	地の文	会話	計
主格	66	9	75
動詞の目的格	6	3	9
前置詞の目的格	23	1	24
			108

後述する *what* の180, 特に *that* の578に比べ多い使用とは言えない。主格, 目的格ともに会話中に用いられることは極めて少く, 関係代名詞としての *which* の活動分野が如何なる程度のものであるかを示している。前置詞の目的語としては1例を除きすべて *whom* の場合と同じく前置詞の直後に来ている。既に述べた理由と共に一つには彼の癖であると思われる。しかもその1例

も前置詞が後置されるのでなければ、不自然な形となり意味もまた不明瞭となる。

...from hot, empty rooms that are waiting for some one else, or just abandoned, *which* you are wheeled in and out of. (WTN, p. 198)

すべて名詞を先行詞とする単純な用法のみで、前節を受ける文語体的なもの、或るいは形容詞を受けるものなどは見られない。指示代名詞、人称代名詞が代って用いられ明確にその役を果たしている。

You did not need a girl. *That* was the funny thing. (IOT, p. 93)

Seney was burned, the country was burned over and changed, but *it* did not matter. (*ibid.*, p. 180)

また the scenery of *which* (IOT, p. 9) の形のみ用いられ、不自然な of *which* the scenery の形もなく、強調、確認のために次に来る名詞を修飾する関係形容詞としての *which* の用法もない。表現を硬くし、口語を基調とする文体と相容れぬためである。

*which* の先行詞には、love, hope, ecstasy, mystery, horror, death などの抽象名詞, picture, photograph, paper, page, cards などの紙類, words, rhetoric, speech, conversation, sound などの言語音声, school-house, hospital, room, factory, cemetery, bridge, fence などの建造物, street, road, trail, place, woods, hills, marsh, lick などの道路, 地形に関するものとその他少数の6種に分れる。勿論これらには *that* も使用され、特に建造物, 地形に関しては *that* が普通で *which* はむしろ例外的ですらある。いずれにしても *which* は総数から言って少いことが特徴の一つで、*that* に優位を保持せられる *which* の姿を表わしていると見て差支えない。特に会話中の *which* の使用は少く、それもほとんど文学作品としてさほど周到な注意を払ったとは思えない *GHOA* に見られるのみである。

## 2 that :

	地の文	会話	計
主格	427	56	483
動詞の目的格	60	16	76
前置詞の目的格	18	1	19
			578

that も地の文に較べ、会話では使用が少いという特徴が明らかに表われている。特に目的格が会話中に用いられることの極めて少いことは、すでに述べた目的格 whom, which の二者の場合と同様である。

地の文の動詞の目的格として作用するものの多い原因は調査の中に *GHOA* を含めたためにある。この作品には、地の文の前置詞の目的語として、また会話の文中の動詞の目的語としても that は多く使用されているが、地の文の動詞の目的語として使用されている中では、約半分を同書で占めている。従って同書を除けば目的格の使用率はさらに低下する。この事実は *GHOA* が他の作品に比し tedious であることを示すものであると言える。

人間を先行詞とする that の場合に見た如く、ここにも comma の次に that を十数回使用しているが、ほとんど地の文中に発見されるものであり、しかも主格の場合が大半を占めている。*GHOA* ではその ⅓ を占める。

The hall too, that the office opened on, was lined with them. (*FTA*, p. 29)

すでに述べたように人間にはほとんどの場合 who が当てられ、人間以外のものに対しては which があまり使用されないことを見れば、that は非常に広範囲に亘って使用されていると考えられるが、それにもやはり先行詞に関し以下の如き一定の傾向が見られる。

人文論究 Vol. 12, No.3 で示した、Hemingway の修飾語に関する用法で彼



が行動的、実際の人間であることが道路に示す彼の関心にみられることを例証したが、いまこの小論で取りあげた関係代名詞の場合も、道路が無視できないものであることが分る。それに関する関係代名詞の先行詞としての約半分以上は road であり、これに続いて street, path, avenue, driveway があり、また trail, track 等がある。そしてこの場合道路の進行方向についての説明がほとんどで、道路そのものの形状、色彩についての説明は形容詞に譲られている。that に対応する動詞には lead が圧倒的に多く、全体のほとんどなかばを占め、go, run がこれにつぐ。その他に follow, skirt, wind, circle, grade, climb, cut up 等があるが数は多くない。street と avenue を先行詞とする関係代名詞の動詞は run 1 例を除いて lead のみで街路が一定の計画の下に建設される性質のものであることを物語っている。road にも多く lead が用いられているが一定の傾向はない。

Then they went into the woods and followed a *trail that led* to the logging *road that ran* back into the hills. (IOT, p. 16)

I walked on down a back *street that led* to a cross-cut to the hospital. (FTA, p. 129)

Later we were on a *road that led* to a river. (ibid., p. 216)

Then they started down a steep *path that went* in long slants down the side of the canyon. (GHOA, p. 94)

関係代名詞を用いないで説明されている道路も少くはない。なお彼は道路の色彩や舗装状況と共にその平坦度には敏感であるが、幅についてはほとんど全く無関心である。

The road dipped sharply to a stream and then ran straight up-hill. (IOT, p. 141)

道路の場合と同様の傾向が door, doorway, corridor, hall, stairway 等に関しても見られる。

The high *door that led* into the bull-ring was shut. (*MWW*, p. 18)

Outside on the porch the cook got off his chair and passed into the *hall that led* back into the kitchen. (*ibid.*, p. 191)

They went in the *door that led* to the gallery. (*FTA*, p. 335)

さらに同じ性質のものとして水路およびそれに類するものがある。即ち, stream, river, watercourse, course, water, dam, current, canyon, valley, ravine, gap 等である。

On the other side of the narrow *gap that led* into the open sea was another high headland. (*SAR*, p. 238)

and the *river, that usually ran* in narrow channels in the wide stony bed (*FTA*, p. 229)

Up the line there was a bridge over a *stream that flowed* into the marsh. (*ibid.*, p. 237)

この傾向はまた彼の特徴を示す態度の一つである地形の眺望に連るものであって、先行詞には次の如きものがある。hills, mountains, ridge, range, bluffs, line, forest, land, meadow, prairies, ground, savannah, flats, place.

He looked across the bay to the *hills that* were begging to sharpen against the sky. (*IOT*, p. 39)

which の客観的な感じに対し that は身近な感じを有しているが、その使用は直接行動する人間や、視線の移動、或いはまた先行詞自体の動的性質に関係するためであると考えられる。そして事実、which の使用はほとんど例外的とも言えるほど少く、わづか数例にとどまっている。

This (The Indian camp) was reached by a *trail which* ran from the cottage through the woods to the farm and then by a *road which* wound through the slashings to the camp. (*WTN*, pp. 231-32)

When we came to the *road which* led back toward the main highway

I pointed down it to the two girls. (*FTA*, p. 213)

生命あるものに関してもほとんどすべて *that* が使用されている。鳥、獣、魚、虫もまた Hemingway の関心を強く惹く対象であって、多種に亘っているが、これらには *who* も *whose* (*GHOA* のみ) も使用しているが、擬人化によるものとは考えられず、また *which* も少数ではあるが見出される。

The *bull who* killed Vicente Girones (*SAR*, p. 199)

this *rhino whose* smaller horn was longer (*GHOA*, p. 83)

This Kzar is a great big yellow *horse that* looks like just nothing but run. (*IOT*, p. 160)

the black *hopper that* was nibbling (*ibid.*, p. 181)

約30種にのぼる動物にくらべ、植物には不思議にも関心がうすく抱括的に *tree* という語ですませているが、これを先行詞にしている時はすべて *that* でうけている。

and beyond the *trees that* lined the road the fields looked too wet (*FTA*, pp. 205-06)

the *trees that* had been struck by lightning (*WTN*, p. 231)

another bed of *reeds that* were high over our heads (*GHOA*, p. 98)

to pluck a grass *blade* or a *leaf that* had the black stain on it (*ibid.*, p. 113)

動植物より移って機械類にもほとんどすべて *that* が使用されている。それらの行動性やそれらによせる親愛感によるものであると思われる。

the traveling *carriage that* hurled the logs (*IOT*, p. 35)

a *roller that* printed the name CINZANO (*SAR*, p. 35)

the *machines that* were to make so much difference (*MWW*, p. 59)

some *boats that* had been pulled up (*ibid.*, p. 109)

自然現象などの動きのあるものにも *that* が用いられている。

*gray smoke that blew across the road (FTA, p. 24)*

*a mist over it that cut off the mountains (ibid., p. 169)*

*the cool light that came in patches (WTN, p. 233)*

*the heavy, woolly clouds that so quickly had covered all the sky (GHOA, p. 274)*

人類を先行詞とするものにも同じ傾向が見られる。

*the cape that Hernandez swung for him (the bull) (MWW, p. 30)*

*the red cloth that was to reduce the bull (ibid., p. 36)*

その他, *straps, rucksack, nightgown, coat, silk dresses, American uniform* 等を先行詞として *that* が用いられている。

以上は *that* が使用されている先行詞についての種類と傾向であるが、普通名詞を初めとし、集合、物質、固有の各種にわたっている。ただ抽象名詞のみはすでに述べた如く *which* が用いられた数例以外ないと言ってよく、観念的、抽象的事柄に関心のない Hemingway の心的傾向が、ここにも表われていると見ることができる。

### 3 省略：

	地の文	会話	計
主格	8	3	11
動詞の目的格	136	124	260
前置詞の目的格	32	14	46
			317

主格で使用されないものは ‘*There+be*’ の形にのみ生じているが、第一章人間を先行詞とするものの項においては、主格で表現されないものが会話中の

みであったのに対し、地の文中に多く生じている。

“There’s nothing really can touch skiing, is there?” Nick said.  
(*IOT*, pp. 142-43)

when you knew that that was all there was (*FTA*, p. 13)

There was no breeze came through the open window. (*MWW*, p. 178)

動詞の目的語となる関係代名詞の省略は、目的格として使用された *which*, *that* の合計の3倍余りが行なわれている。前置詞の目的語の場合は *which*, *that* の使用されたものの合計と略々同数であるが、動詞の場合に比し約 1/3 の割合になっている。上述の使用されない場合ではなく消滅する場合もある。連続的動作や視線の移動の場合に生ずるもので、その場合には代って人称代名詞や名詞が用いられる。

Nick kicked a loose spike and *it* dropped into the water. (*IOT*, p. 67)

The beans and spaghetti warmed. Nick stirred *them* and mixed *them* together. (*ibid.*, p. 187)

He came down a hillside covered with stamps into a meadow. At the edge of *the meadow* flowed the river. (*ibid.*, p. 184)

#### 4 what:

地の文	会話
68	112

会話では地の文に較べかなり多く用いられていることが発見されるが、特に論ずべきことはない。ただ一箇所 *that which* の形が使用されていることに注意が惹かれるが、それは *what* に比し明確度の高いためであろう。先行詞が漠然としているが故に *what* が使用されるのであって、*that which* は実際には

このように稀であり、学校文法などで等記号を用いて換置するのは誤解を与えることとなろう。

“I will get you a copy. It was *that which* shook my faith.” (FTA, p. 7)

### III. 先行詞の修飾語との関係

学校文法で必ず論ぜられている *that* の用法の一つに、先行詞が意味の強い語に限定された場合があるが、調査の結果そのような場合の関係代名詞の使用は次のようになっている。取り上げたものは *-body*, *(-)one*, *(-)thing* に *some*, *any*, *every*, *no* が前置されたものと, *all*, *only*, *same*, および *first*, *last* を含む最上級に関連するものである。

人間	地の文	会話	人間以外	地の文	会話
who	7	5	that (主格)	36	20
that (主格)	3	1	〃 (動詞の目的格)	8	5
省略 (主格・目的格)	16	18	〃 (前置詞の目的格)	3	—
			which (主格)	2	—
			〃 (目的格)	3	—
			省略	67	90

総数 284, ほとんどが *that* であり *who*, *which* は極端に少い。

“Can one?” asked the *biggest one*, *who* had very thick lips and was quite fat. (WTN, p. 203)

A joke on *all* the people *who* had them. (GHOA, p. 38)

The *only* thing *which* was new to him was the radio. (WTN, p. 209)

先行詞に対する修飾語の持つ性質に応じて *that* が好ましいとする理由以外に、その使用には Hemingway のまた 現代英語一般の特徴である *that* の多用にも原因があると思われる。

人間の場合には目的格の使用は全然なく、所有格の使用もない。人間以外の場合でも目的格の用いられるのは極めて少数でほとんどすべて表わされない。Hemingway の文の、特に会話の運びの生きいきとした、迅速さの一因をなすものであると考えられる。この傾向の特に著しいのは、主としてそれ自体が先行詞ともなる *all* である。この語を先行詞とする関係代名詞に目的格の使用されたものは人間に関しては全然なく、それ以外では 5 例あるのみで、他の 82 例はすべて省略されている。次の第 1, 2 例と第 3 例の一部は目的格の *that* が用いられている極めて少数の例である。

“But, darling, I have to see you. It isn't *all that* you know.” (SAR, p. 26)

“I can't,” said the girl. “That's *all that* I mean.” (WTN, p. 53)

“My wife knows now *all* I think, *all* I say, *all* I believe, *all* I can do, *all that* I cannot do and cannot be.” (GHOA, p. 18)

その他, *all* they did, *all* he needs, *all* the papers he could get 等枚挙にいとまがない。これらにおける省略の原因は、それらが一句としてまとまって発音されるためであり、また目的格のない方がかえって自然的で理解を容易にするためであろう。限定度の強い語が先行詞を修飾する場合, *that* を使用するという規則も目的格については、その規則以前に、Hemingway の場合のみならず、英語一般についても余り使用されない傾向にあるとする方が一層实际的であり妥当であるように思われる。

上述の傾向は強意形の ‘It+be... 関係代名詞’ の型についても大体当てはまる。一般的傾向として会話に現れる場合が地の文より遙かに多いのもその性質から当然である。関係代名詞としては主として *that* が使用され、*who*、特に *which* は少数である。先行詞はその直前の名詞、代名詞であって、*It* を受けていることはない。

The machines were new then and *it was we who* were to prove them  
... (MWW, p. 65)

*It's* only the first labor, *which* is almost always protracted. (FTA,  
p. 331)

目的格は使用されていない場合もあるし、そうでない場合もある。一般的に主格に比し総数が少ない。

*It was* American pipe-tobacco *that* he wanted, ... (FTA, p. 253)

*This was* Brett, *that* I had felt like crying about. (SAR, pp. 34-35)

#### IV. 同一語の反覆

修辞学をまたなくとも一般に同一文中における同一語の反覆使用は、強調その他特殊な場合をのぞいて好ましくないとして避けられるのが普通であるが、Hemingway の場合は同一関係代名詞の繰返し、指示代名詞、代名形容詞などの *that* と関係代名詞 *that* の併用などが認められる。人文論究 Vol. 12, No. 3 で修飾語に関して見た同一語の反覆使用や、同一名詞に同一修飾語を用いて変化を求めることの少なかった傾向と一致するものである。同一関係代名詞の反覆使用は先行詞を強調すると共に文の無用のとどこおりを少くし、Hemingway の文体の最大の特徴と考えられる速度を増加している。他の種類の同一語との併用も指示代名詞、代名形容詞の発音は強く、関係代名詞のそれは弱いという発音の強弱の差、或いは関係代名詞 *that* は *which* よりもより日常的であることなどにより口語文章の美を破壊することのないためと思われる。いずれにしても外形的な修辞学的技巧に、文の速度や自然的な話し振りの重要性が先んじたと考えざるを得ない。

"I can't," said the girl. "*That's* all *that* I mean." (WTN, p. 53)



“*That’s a young man that will go a long way in Italy,*” I said to Guy. (*MWW*, p. 101)

and *that river that* the Tartars crossed, ... (*GHOA*, p. 108)

“*Who was the woman who* cried when I came in?” (*FTA*, p. 88)

同一文中に2以上の関係代名詞を使う場合、先行詞が異質か、次に引用の最後の2例のようにやむを得ざる場合の他、先行詞が同一または同種類である時でもこの傾向は変らない。

a Dutch hunter *who* had been here a year ago and *who* was Dan’s great friend (*GHOA*, p. 161)

“There is a class *that* controls a country *that* is stupid and does not realize anything and never can. ...” (*FTA*, p. 53)

It went away slowly, the feeling of disappointment *that* came sharply after the thrill *that* made his shoulders ache. (*IOT*, p. 205)

a trail *that* led to the logging road *that* ran back into the hills. (*IOT*, p. 16)

a trail *which* ran from the cottage through the woods to the farm and then by a road *which* wound through the slashings to the camp. (*WTN*, pp. 231-32)

a photograph *which* showed a hand *that* had been withered (*MWW*, p. 60)

That night a bat flew into the room through the open door *that* led onto the balcony and *through* which we watched the night. (*FTA*, p. 105)

次例の如き、いわゆる二重制限の例も少い。

She is the only lady I have ever known *who* was as charming when she was drunk as when she was sober. (*SAR*, p. 29)

なお同一文中での関係代名詞の繰返しに関連して考えられるのは文の長短の

問題であるが、関係代名詞が長文の原因となっているという傾向は見出されない。数十或いは百を超える語をもって構成されている one sentence はかなり見出されるし、時には二百語に近いものもあるが、その中に使用された関係代名詞はわずかに一度か二度であって、長文の主たる原因は単なる単文の形式の並列である。関係代名詞の二重制限や関係代名詞を含む従節に対しさらに従節が追加されるといった複雑な構成をもった長文はない。したがって Hemingway の場合には、構文の複雑さの故に読者の思考、想像力が浪費されるということはない。それらはもともと Hemingway の卒直行動的な気質や体質と合致しないものであろう。しかし強いて求めれば数箇所例外的なものはあるが、次の引用例を除いて、いずれも六十語内外であり、関係代名詞の用いられた数も 3～4 である。

There had been a sign to detour in the centre of the main street of this town, but cars had obviously gone through, so, believing it was some repair *which* had been completed, Nicholas Adams drove on through the town along the empty, brick-paved street, stopped by traffic lights *that* flashed on and off on this traffic-less Sunday, and would be gone next year when the payments on the system were not met; on under the heavy trees of the small town *that* are a part of your heart if it is your town and you have walked under them, but *that* are only too heavy, *that* shut out the sun and *that* dampen the houses for a stranger; out past the last house and onto the highway *that* rose and fell straight away ahead with banks of red dirt sliced cleanly away and the second-growth timber on both sides. (WTN, p. 225)

## V. 補 足 的 使 用

約1700の関係代名詞は常にすべて単純明確な用法のみで、簡潔な口語文体を

作り上げている。人間には *who* を主とし、それ以外では *that* を主とする。同じように口話体でありながら地の文と較べて会話には関係代名詞は相当少く、前者に比し一層生彩に富み速度を感じさせる原因となる。また次に目的格は地の文、特に会話においてはまれにしか使用されない。文語的な compound relative pronoun も数例あるのみで、また quasi-relative pronoun もほとんど使用されていない。要するにすべて口語的な、かつ速度感にあふれる特徴を備へ、Hemingway の正確で行動的な体質を表わしている。

これらの外形的特質はさらにその内的特質とも一致する。彼の使用する関係代名詞は種類、格、或いは省略、さらに地の文、会話の如何を問わず、先行詞に関する補足的説明をなす従属節において使用されることを原則としている。

She was a very tall girl *who* walked with a great deal of movement.  
(*SAR*, p. 45)

Inside, against the bar and at tables, were most of the crowd *who* had been at the dance. (*ibid.*, p. 28)

and it was good to get out of the sun and under the shade of the arcade *that* runs all the way around the square. (*ibid.*, p. 94)

I went to the Ayuntamiento and found the old gentleman *who* subscribes for the bull-fight tickets for me every year, ... (*ibid.*, p. 94)

These were not like the brown, heat-baked mountains we had left behind. (*ibid.*, p. 108)

挿入句となる場合を含めて comma の有無等による外形はともかく、その内容から見て、連続的動作に関して、文語体的ないわゆる追叙的に用いられることはまれであると言ってよい。それが数多くの従属文を駆使しながらも、従属文を感じしめない理由である。関係代名詞を以て連結できる多くの場合にも、連続的動作があれば、大抵は単文の並列的使用が行なわれる。従って単なる単文の羅列でないことはいうまでもない。同一の句や文の繰返しを含めて対象に

対する強烈な集中があり、次には弛緩が生じ、さらに再び集中があって、対象に長く停滞したり、その周辺を低迷するようなことはない。その簡潔さとこのようなりズムが文に力と速度とを与え、口語体を基調とする文体に内面より相応ずる態勢を作り上げている。たとえば、

*She stood holding the glass and I saw Robert Cohn looking at her.*  
(SAR, p. 22)

*I was rubbing down when I heard the door-bell pull. I put on a bathrobe and slippers and went to the door. It was Brett. Back of her was the count. He was holding a great bunch of roses. (ibid., p. 53)*

*There were only a few patients, and they all know about it. (ibid., p. 83)*

には作者の視線の移動がはっきりと感ぜられ、停滞をかもし出す関係代名詞の使用が避けられていることに気づくであろうし、これは次の *who* の使用によって一時視線が停止しているもの（一瞬後にはその視線は移ってはいるが）と較べれば一層明らかに理解される。

*He was standing with Brett, who was sitting on a high stool, her legs crossed. She had no stockings on. (SAR, p. 78)*

われわれは Hemingway の行動的体質が一度文に移されれば力と律動と速度とに結実することを知るのであるが、関係代名詞の用法のみを取り上げてみても、Hemingway が関係代名詞のもつ外形的作用と内面的作用に深く注意し、自己の体質に適したすぐれた文体を作り上げていることを発見するのである。

——関西学院大学文学部専任講師——